

義興

シテ 新田義興

ワキ 旅僧

所 武蔵矢口

次第、ワキ
「憂世の夢の覚やらぬ。く。身の行末ぞはかなき。

ワキ詞
「是は諸国一見の僧にて候。我此程は武蔵の国に候
ひて。事旧たる寺社拝みめぐりて候。又是より鎌
倉一見と心ざし候。

道行
「紫の所縁ある野を分暮し。く。墨の衣手露けき
に。あはれ数そふ旅枕。夢もむすばぬ草莚。お
もひをのぶる方もなく。名にのみ聞し矢口なる。
渡りにはやく着にけり。く。

詞
「あら嬉しや渡りを越て候。是によし有気なる宮居
拜まれさせ給ふ。人を待て謂を尋ばやと思ひ候。

サシ
「昨日と過。けふと暮しつ明日はまた。斯こそあら
め何迄も。神の恵みをあふぐなり。いざく歩み
を運びつゝ。神に仕への御注連縄。榊葉に祓とり
添て奉る。払ひ給へ清めて給ふ。

歌
「頼む誓ひは数々の。神に祈りをかけまくも。

歌
「かたじけなしや是とても。く。只浅からぬ心も

て。何うたがひの有べきや。実神徳はよも尽じ。

絶せぬぞ手向成べしや。猶々祓を捧む。く。

ワキ「いかには成人に尋申べき事の候。

シテ「此方の事にて候か。何事にて候ぞ。

ワキ「只今白木綿祓を捧られ候御神は。如何成神にて御

座候ぞ。

シテ「さん候。此社は新田左兵衛義興を神と崇め申候。

往昔官領足利基氏と畠山道誓心を合せ。竹沢を頼

み。義興の方へ降人に出し。種々の計略をめぐら

し。此渡りにて義興は討れ給ふ。されば其靈様々

の奇瑞をなし給ふにより。此所に社を建。新田大

明神と崇め申候。加様に申せば我ながら。余所に

はあらぬ泡の。草の蔭のゝ露と消しを。懺悔のた

めに来りたり。現とな思ひ給ひそとよ。

同「実や思へば何事も。く。みな夢の有様を。語る

もよしな義興が。なき跡とひてたび給へ。疑はせ

給ふなと。いふ声も幽かに。立隠れつゝ失にけり。

ワキ

「扱は義興の幽魂仮に顕れ。我に詞をかはしけるぞや。猶も姿を見るやとて。

歌

「夕部の空の草枕。く。露を片敷夜と共に。此御経を読誦する。く。

後シテ

「落花枝に帰らずといふに。猶執心の魂魄の。妄執の心は晴やらず。我と此身を苦しむる。嗔恚の程社はかなけれ。

ワキ

「不思議やな。はや深更に成哉覧と。夜の灯幽かなる。光の内に人影の。甲冑を帯し見え給ふは。義興にてぞましますらん。

シテ

「はやくも御覧ど給ふ物哉。御約束をたがへどと。重て姿を顕はし衣の。猶妄執の雲霧を晴してたばせ給へとよ。

ワキ

「愚かやな。心からこそ迷ひの雲霧。払ばなどか真如の月の。

シテ「曇りはあらじ。夜半の空の。

同「影清き。教へもしるき法の道。く。迷はぬは心
ならましと。受る身ながらまた爰に。生死の海を
越やらで。執心のふかき世語りを。懺悔にいざや
申さんく。

クリ、地「実や龍門原上にかばねをさらすといへども。武将
誉れの名をば埋まず。

サシ「思ひぞ出る閻浮の有様。

同「月日もゆけど妄執の。心の闇の晴やらぬを。慙愧
懺悔にあらはして。心の水のにごりをすまさん。

クセ「偕も道誓は。竹沢に申付。義興を謀べしと有しか
ば。我に好みを因みつゝ。様々成し謀事。運の尽
ぬるはかなさは。打解たりし其気色。よも二心有
まじと。おもふもわりなかりしに。

シテ「竹沢と江戸兄弟。

同「心の儘にたばかり。忍びやかに鎌倉へ。我を伴な

ふ。運の尽ぬるはかなさは。矢口の渡りの舟場に。
術をかまへ河中にて。頓て舟をぞ沈めける。左右
の川の辺りには。矢尻を揃へ扣へつゝ。相図を定
め責しかば。遁れん方はなかりけり。

シテ
「荒忘れがたの執心やな。

シテ 詞カケリ
「あら絶がたき修羅の苦患や。中にも井の弾正土肥
南瀬市川は。手と手を取て水底をくぐり。向ひの
岸に打上て。

同
「敵陣に破て入。く。日本一の不道人に。たばか
られぬる口惜さよ。七生までも恨みをなさんと大
にいかり。少時が程こそ戦しが。

シテ
「運つき弓の力も弱り。

同
「運つき弓の力も弱り。よはり行て。手の下に討れ
し。其亡念の胸の焰に身を焦すを。さと人あはれ
み我霊を。一社と崇め折節に祭るといへども。妄
執の雲霧の五衰三熱深かりつるを。今御僧に逢奉

り。懺悔に晴る胸の煙。胸の煙は消々と。かげろ
ふ姿はうせにけり。

底本…国立国会図書館デジタルコレクション『古今謡曲解題』丸岡桂 著
『宴曲十七帖 謡曲末百番』国書刊行会 編